



プロのカメラマン達が撮った水俣の写真を持参し行う小学校での出前講座



水俣の無農薬夏みかんを前に写真集のをぞき込む子どもたち



バリアフリー写真展で写真家・芥川仁氏から説明を受ける観覧者たち



取材・文／
特定非営利活動法人
浜松NPOネットワークセンター(N-Pocket) 代表理事
井ノ上 美津恵さん

学習塾を20余年主宰。'89年、台所から環境や平和を考えるグループティオ設立。盲学校での講師経験が契機となり点訳ボランティアや養育里親など福祉活動も開始。'97年、N-Pocket設立に関わり、主に障害と情報をテーマにした事業を担当。'07年1月より現職。

からだそうです。池谷さんたちは、バリアフリー美術展について調べ、視覚に障害がある人と一緒に写真を撮る楽しさという試みで、写真の印象や感想を文章にし、それを点字にしたものも用意したそうです。その試みは、二〇一〇年二月に「伝えるネット・首都圏」が主催した「水俣」を見た七人の写真家たち「相模原展」に引き継がれました。ここでは、音声ガイドなど、より多様な技量

をもつボランティア団体に関わっていたら、互いの活動のネットワークを強化する副産物もあったそうです。こうした新たな視点で活動を広げることができたのも、「伝えるネット・浜松」のメンバーに視覚障害がある人がおり、団体として障害の有無を越えた活動を実践していたから成り得たことではないでしょうか。池谷さんはこういいます。「水俣病は公

式確認から五十数年経ちます。私たちは未だ解決していない水俣病事件の事実から、人としての生き方、社会のあり方など、多くのことを学ぶことができます。地縁・血縁がない私たちだからこそ、同じ生活者の地平にたつて人間的想像力を働かすと、自分の自分の暮らしへの学びだと気づきます。その「気づき」が活動の原動力になっているのです。」

「一九九九年十月、アクトシティ浜松展示イベントホールで「水俣・浜松展」が開催されました。主催したのは水俣・浜松展実行委員会。前年八月、豊橋市で行われた「水俣・豊橋展」に心を動かされた人々を中心に、浜松でも開催したいと、口コミで二〇名を超す有志を募り発足させた団体でした。実行委員会は、浜松NPOネットワークセンターを拠点とし、その準備に二年近くかかりました。実際に九日間の開催中に七千人余の入場者があり、市民だけで企画運営したとは思えない規模のイベントとして大成功を収めました。

子どもたちは真ん丸な瞳で、真剣に話を聞いてくれました。このとき、「水俣病事件は大切なことを教えてくれる。大切なことは私たちの身近な子どもにもこそ伝えたい」と池谷さんは強く思ったそうです。現在、「伝えるネット」は、札幌、首都圏、豊橋、浜松に窓口を持ち、それぞれのスタンスで活動を行っているそうです。主な活動は出前授業で、小中学校や高校に出かけ、「水俣病事件」について話すこと。それらの授業では、子どもたちと共に考えるよう心がけ、そのため、水俣病関係のシンポジウムなどに参加し、被害者の話を聞いたり、水俣現地での研修を行ったりして、自分たちの日々の学びも大切にしているそうです。二〇〇六年に田尻賞を受賞しているのも納得です。池谷さんが代表を務める「伝えるネット・浜松」では、二〇〇〇年の発足以来、毎年三学期になると必ずお呼びがかかる授業があるそうです。出前先是浜松市立入野小学校五年生。五年生担当の先生が年間計画に「水俣」を組み込んでくださっているから、と伺いました。

「水俣・浜松展」において、社会科の教科書で「水俣病」について学ぶ小学五年生を招待し、十数校の子どもたちに水俣で起こったことを直接語りかけることをしていたからです。被害者の言葉「水俣病事件は人が人を人と思わなくなった時に始まった」、胎児性水俣病の我が子を「宝子」と言い、みんなで大切にして生活した家族のことなど。子

また、二〇〇八年六月には、豊橋と浜松で、「水俣」を見た七人の写真家たち」写真展を開催。このときは、「視覚障害のある人にも見える写真展」として企画し、大きくメディアにも取り上げられました。普段から、視覚に依存する写真で伝えることが前提になっている活動にバリアを感じていた

第8回 生涯学習を仕事にする

中間支援NPOの方が
地域で活躍する方々を紹介

水俣からの気づき「いのち」を子どもたちに伝えたい

「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク・浜松 代表
池谷 雅子さん